

「論文」

付加疑問との連鎖関係からみたテール（右方転位構造）の機能 —イギリス英語の会話コーパスを用いて—*

山崎のぞみ

Abstract

The aim of the study is to explore how the co-occurrence of tails (right dislocations) with tag questions influences functions of tails performed in casual conversation. Tails often occur with tag questions in utterance-final position and can be placed either before or after them. Tails perform mainly two pragmatic functions: a disambiguating function for clarifying reference retrospectively, and a phatic and interpersonal function for creating effective connection with the hearer. Based on the Spoken British National Corpus 2014 (Spoken BNC2014), the data was analyzed with reference to (i) the order of tails and tag questions, (ii) the formal and meaning features of tails, and (iii) whether the utterance with a tail is evaluative or not. The analysis has shown that two types of tails exhibit different functional patterns according to the order with respect to tag questions. Noun phrase tails tend to serve to identify and clarify referents retrospectively when they follow tag questions, while they tend to perform the interpersonal function when preceding tag questions. In the case of pronoun tails, one-word tails, mostly *that*, almost always precede tag questions; but more than one-word tails are very likely to occur after tag questions, which suggests that they are closely related to the disambiguating function. It is shown that tails have their own combinatory behavior with respect to co-occurring tag questions.

1. はじめに

話し言葉に特徴的な言語形式の一つに、‘tail’と呼ばれる右方転位構造（right dislocation）がある（用語については2節で述べるが、以下「テール」と呼ぶ）。(1)の「あれは『バック・トゥ・ザ・フューチャー』にも出てくるよね、あの歌」という発話では、下線部の *that* と同一照応の要素 *that song* が再度、節の

域外に現れている。この *that song* のような言語要素をテールという。以下の発話例では、テールを太字で、テールが照応する節中の要素を下線部で表す。

- (1) S0653: that's in Back to the Future as well **that song** isn't it? (SZFG)¹

節を構成する統語要素として位置づけられない離節的要素であるテールは、伝統的な書き言葉中心の文法では、正規の語順から逸脱した周辺的あるいは方言的な非標準英語として、十分に扱われてこなかった。しかし、話し言葉研究の進展によって、この構造は話し言葉に万遍なく現れることが分かり、特定の変種や地域、社会階級に限定されない標準形式として認識されている (Carter, 1999: 154; Timmis, 2009: 343; Carter, Hughes, & McCarthy, 2011: 81; Durham, 2011: 257)。テールが現れる場所は、様々な語用論的調節が行われる発話の「周辺部」(澤田・小野寺・東泉, 2017) である。発話末要素の一種であるテールは、先行要素の指示対象の明確化や強調、話者の態度表明・感情表出、聞き手との連帯感の創出などの語用論的・談話的機能を持つことが指摘されている。

テールは、発話頭に起こる談話標識 (discourse marker, DM) が *and then* や *oh well* のようにしばしば連鎖して起こるのと同様、他の発話末要素と共起することが多い。*though*, *apparently* のような副詞句とも共起するが、(1) の *isn't it* のような付加疑問との共起が特に目立つ。評価や感情を緩和して伝えたり、聞き手を会話に巻き込んだりする付加疑問の機能はテールと共通する部分があるが、テールのふるまいや機能は単体で議論されることが多く、付加疑問と並置された場合の連鎖関係がテールの働きにどのように影響するのかという点については説明されていない。

本稿では、テールが付加疑問と共起する場合、選好される連鎖順序があるのかどうか、また、連鎖の仕方によってテールの機能に違いが見られるのかどうか、というリサーチクエスチョンに取り組む。イギリス英語の日常会話を収めた *The Spoken British National Corpus 2014* (*Spoken BNC2014*) を用いて、テールと付加疑問が共起している発話を収集し、テールの形式や意味、発話の評価的機能の面から分析する。本研究はテールと付加疑問の連鎖に限るが、これによって発話末についての理解、さらには発話末要素の連鎖構造についての理解を進めたい。

2. 研究の背景

2節では、テールの形式（2.1節）、テールの語用論的・相互行為的機能（2.2節）、テールが付加疑問など他の発話末要素と連鎖する場合（2.3節）についての先行研究を概観する。

2.1 テールの形式

テールは発話の周辺部である発話末に現れる。ここでは「発話」は基本的に、中心的メッセージ（発話の概念的核）（澤田・小野寺・東泉, 2017: 4）を有した統語的単位、あるいは、節のように統語的に完結していなくても一つの発話行為や命題を有した単位、さらに、その概念的核に付加された周辺部の要素から成る。(1)の発話は、以下のような構成で表され、テールの **that song** と付加疑問 **isn't it** が発話末要素である。発話の周辺部は、概念的核の前に置かれる発話頭もあり得るが、この発話には発話頭要素はない。

- (1) S0653: that's in Back to the Future as well **that song** isn't it? (SZFG)
概念的核 | 周辺部（発話末）

テールの形式を指す名称や定義は様々である。Quirk et al. (1985: 1310, 1417) は 'amplificatory tag', Biber et al. (1999) は 'noun phrase tag', Leech (2000) は 'end dislocation', Durham (2011) は 'right dislocation' と呼んでいる。Aijmer (1989), Carter & McCarthy (1995, 2006), Rühlemann (2006, 2007, 2019), Timmis (2009, 2015a, 2015b) は、書き言葉が前提である左右への移動という空間的比喩を用いた 'dislocation' (転位) ではなく、前後という時間的比喩の 'tail' という用語を使っており、これに倣って本稿でも「テール」と呼ぶ。

テールと見なされる形式も一通りではなく、反復や同格、省略、倒置などの言語現象と重なる側面を持つ。一般的にはテールは3～4タイプに分類される。最も標準的な形式は以下の (a) のような名詞句 (NP) テールで、次が (b) のような代名詞 (PRO) テールである。さらに、(c) の SV 形式や倒置型の (d) VS 形式のテールを含めることもある。

- (a) S0167: he sounds like he's got some serious mental issues **that man** [NP] (SAB7)

- (b) S0521: well that's interesting **that** [PRO] (SZNA)
 (c) S0611: it was bad maths **it was** [SV] (S2EF)
 (d) S0268: >>yeah it's a lot of **it is time** isn't it? [VS] (S69V)

この他, 'nice it was.' のように, テールが照応する要素が前の部分で省略されているものもある。照応要素の省略を伴うものを, Rühlemann (2007: 197) はテールの一形式と見なしているが, Durham (2011: 265) は, 倒置や補語の前置といった構造との区別が不明瞭のためテールには含めていない。このように, 用語の定義や含める形式は研究によって異なる。(c) (d) の SV / VS タイプは (a) (b) タイプより頻度が低いため, 本研究では, (a) の名詞句テールと (b) の代名詞テールのみを扱い, 照応要素の省略もテールに含める。

2.2 テールの機能

発話末は, 会話参加者のやりとりに重要な語用論的調節がなされる場所と言われている(澤田・小野寺・東泉, 2017: 4)。Timmis (2009: 341) によると, 発話末のテールは, 会話の状況的要因である「リアルタイム性」(rea-time processing) と「話者同士の対人関係の調整」(relation management) に特に対応した言語現象である。テールが果たす語用論的・相互行為的機能を, この二つに沿って概観する。

第一に, 自然発生的な話し言葉に特徴的なテールは会話のリアルタイム性に即している。つまり, リアルタイムに会話を行う中で, ある要素が指示するものを後から思い出したように発話末で繰り返す。したがってテールは, 同じくリアルタイム性を要因とする会話の通常の非流暢性 (dysfluency) の特徴や, 修復 (repair), 反復 (repetition) といった言語現象と重なる面を持つ。(2) の会話例を見る。

- (2) S0264: erm and erm and the sandwiches were quite strange as well cos I I remember erm last last week there were erm I don't are they called shrimp or prawn?
 S0265: prawn probably
 S0264: and may- yeah sandwiches but erm I think they're quite expensive aren't they **prawns**? anyway there was nothing like that (SJAW)

話者 S0264は、下線部の they が指示するものが直前に言及した sandwiches ではなく prawns であることを、後から思い立って確認するようにテールで付け加えている。澤田（2016: 198）が「後出し的に指示を確定する」、Quirk et al. (1985: 1310) や Aijmer (1989: 148) が ‘postponed identification’ と言うように、テールには後付的に指示対象を確認・明確化する機能がある。(1) や (2) のように、テール（太文字）は名詞句で、テールが照応する要素（下線部）は代名詞の場合に特にその機能が見てとれる。さらに Biber et al. (1999: 958) がテールのことを、遡及的にトピックを標示する ‘retrospective topic markers’ と呼んでいるように、テールには談話で重要な要素を繰り返して強調する強意機能もある。

第二にテールには、「話者同士の対人関係の調整」に即して、聞き手との間に感情的結び付きや連帯感を作り出して心的距離を縮める対人関係的機能があると指摘されている（Aijmer, 1989; Carter & McCarthy, 1995; Rühlemann, 2007; Timmis, 2009; Carter, Hughes, & McCarthy, 2011; Durham, 2011）。テールを伴う発話は、会話参加者に既知の物事に対して、話者が即時的に態度や感情を表出する評価的な発話のことが多く、テールには聞き手との協調関係や共感をもたらす交感的機能があると認められている。Carter, Hughes, & McCarthy (2011: 81) は ‘Tails are an important feature of a listener-sensitive, affective grammar’ と評し、McCarthy & Carter (1997: 413) もテールを、共感や連帯感の創出を目的とした「やりとりのムーブ」(reciprocating move) の要素の一つに位置付けている。

Timmis (2009: 337) が述べているように、個々の文脈で使用されるテールは、指示対象の確認・明確化機能と対人関係的機能のどちらか一方だけを持つわけではなく、両方の機能を持つと考えられる。Biber et al. (1999) は指示対象の明確化をテールの主機能としている一方、McCarthy & Carter (1997) や Aijmer (1989) は対人関係的機能が主であると述べるなど、どちらの機能が優勢かという点については論じられている。また、テールの形式の違いを機能の違いに結び付けている研究もある。Rühlemann (2007: 198, 200) や Mycock (2017: 255) は、テールが名詞句の場合は指示対象の確認・明確化の機能を持つが、テールが代名詞の場合は付加疑問など他の発話末要素と共通する対人関係的機能を持つと述べている。

2.3 テールと他の発話末要素の連鎖

1節で指摘した通り、テールはしばしば他の発話末要素と共起する。発話頭

の連鎖については例えば, *and then* や *oh well* のような談話標識 (DM) の連鎖構造を論じた Lohmann & Koops (2016: 419) が, 類似の意味や機能の DM が共起しやすいという傾向を利用して個々の DM の意味や機能を判別することができる」と述べている。しかし, 発話頭の研究に比べて発話末要素の連鎖についての研究は進んでいない。テールに関しても同様だが, 一部の研究はテールが発話末で類似機能の語句と共起する点に言及している。例えば McCarthy (1998: 180) は, タグ, ヘッジ, モダリティ機能の語句, Carter, Hughes, & McCarthy (2011: 89) は *though* や *apparently* などの連結副詞や様態副詞と共起することを指摘している (*'It can lie dormant for years it can though apparently shingles'*)。本研究の対象である付加疑問との共起については, *'I just give it all away didn't I Rudy my knitting'* という例を挙げている Rühlemann (2007: 197) や, Mycock (2017: 265) が触れている。Carter, Hughes, & McCarthy (2000: 149) も, テールは付加疑問の前にも後にも起こり得るとして, 両者を使った会話を例示している。Timmis (2015b) は, 付加疑問との共起をテールの形式に関連づけて, 2.1節の4形式のうち, (a) (b) は付加疑問と共起するが, (c) (d) は共起しないと述べている。

上記のような共起情報は, それ自体, テールの働きや機能の識別のヒントになり得るが, 共起語と機能の関係をより明示した記述も散見される。Aijmer (1989: 151-152) は, *actually* や *really* などの副詞句が発話末でテールと共起することが, テールの社会的・対人関係的機能の証となり得ることや, 付加疑問などの緩和表現と共起するときはテールも緩和表現として機能することを記している。しかし以上のような研究でも, テールと他の発話末要素が共起する順序と機能の関係については扱われていない。

3. データと調査方法

本調査は The Spoken British National Corpus 2014 (Spoken BNC2014) というコーパスを利用する。Spoken BNC2014は, 2012~2016年に収集された668人のイギリス英語母語話者による1,150万語の会話コーパスで, 収められている会話は全てインフォーマルな日常会話である (Love et al., 2017)。自然発生的な会話コーパスとしては大きい規模だが, 2.1節で述べたように, テールの定義や形式は一通りではないため, 自動抽出や量的調査には困難が伴う。Timmis (2015b) が敢えて小規模コーパスを用いたように, 手作業による個別の判別が

避けられない。加えて本研究は、様々な形式があり得る付加疑問との共起を対象とするため、生起パターンも多岐に渡る。その結果、統計解析手法を用いた量的調査を実施できない難点があり、限られた数のデータを文脈的に分析する質的調査に重点を置かざるを得ない。しかし一方で、出現頻度が高いとは言えないテールと付加疑問の共起例を効率的に収集して傾向を見出すには、タグを利用した検索が可能なコーパス、それも、比較的大きい規模の会話コーパスが有用であると考え、Spoken BNC2014の利用を決定した。また、2000年代に話された日常会話を収める最新コーパスを用いることで、現在のイギリス英語における発話末要素の出現パターン的一端を捉えることができると考える。

したがって本研究では、コーパスからの網羅的抽出は目指さず、自動抽出と手作業による識別を繰り返して付加疑問の前後に現れるテールの収集を行った。付加疑問も形式が多様な上、テールよりはるかに高頻度のため、be動詞を含む肯定文の後に続く付加疑問（{be/V} n't _{PRON}）に限定した。ヒットする付加疑問の発話は進行形のものも含むが、テールを伴いやすい評価的・感情表出的なコンピュータ文の発話が比較的多いと予想されるためである。この付加疑問の検索式の左右に、名詞、代名詞、that（+名詞）、疑問符（?）、ターン末のタグ </u>² を様々なパターンで配して検索し、テールを含むものを手作業で抽出した。指示代名詞 that は、‘That was a crafty move **that**.’ (Rühlemann, 2007: 197) のように、名詞句テールにも代名詞テールにもしばしば用いられることが分かっている (Rühlemann, 2007: 197; Durham, 2011: 262; Timmis, 2015b: 319–320)。Spoken BNC2014は韻律情報を含まないため、注1にあるような最小限の音声情報は活用したが、テールかどうかの判断に迷うものは除外した。下記は、利用した検索式の数例である。that (_{N})? {be/V} n't _{PRON} / _{N} {be/V} n't _{PRON} \? </u> / {be/V} n't _{PRON} that / {be/V} n't _{PRON} that (_{N})? \?

4. 結果と分析

3節で述べた調査方法によって、表1の通り、付加疑問と共起するテールを名詞句 (NP) テール207例、代名詞 (PRO) テール82例、収集した。

表1 付加疑問と共起するテールのタイプ

	名詞句 (NP) テール	代名詞 (PRO) テール
収集数	207	82

表1のそれぞれのタイプのテールについて、付加疑問 (Tag Question, TQ) との順序を調べた結果が表2である。名詞句テールの合計数が表1と異なるのは、付加疑問がテールの前後、あるいはテールが付加疑問の前後についている場合は両方の順序にカウントしたためである。以下の分析・議論は、このデータを元に行う。

表2 テールと付加疑問 (TQ) の順序

	TQ + TAIL	TAIL + TQ
名詞句 (NP) テール (N=210)	165 (79%)	45 (21%)
代名詞 (PRO) テール (N=82)	39 (48%)	43 (52%)

4.1 名詞句テール

名詞句テールが照応する言語要素は (1) の下線部 *that* のように代名詞が最も一般的である (Timmis, 2009: 333)。本調査の名詞句テールも、207例のうち、先行する照応要素が代名詞のものが185 (89%) と圧倒的に多かった。したがって、照応要素より名詞句テールの情報量の方が多く、名詞句テールの主機能は指示対象の確認・明確化と推察される。以下では、付加疑問との共起を考慮に入れてテールの働きを考える。

4.1.1 テールと付加疑問の順序とテールの機能

Rühlemann (2007: 87) は、yes-no 疑問文の一形式である付加疑問の基本的機能を、‘to invite co-construction’, つまり、聞き手に会話の協同構築を働きかけることであると述べている。テールも聞き手志向の言語現象で、強調機能や聞き手との感情の共感や連帯感を作り出す機能は付加疑問と共通する。類似機能の両者の連鎖は、それらの機能をより強めていると考えられる。テールと付加疑問の共起関係をさらにつかむために、順序の関係を調べてみる。表2が示す通り、名詞句テールの場合、(3) のような「付加疑問+テール」(79%) の順序の方が、(4) のような「テール+付加疑問」(21%) より約4倍多い。

(3) S0136: >>yeah (.) so but it's a much better place now *isn't it?* **The park?**

(SC7H)

- (4) S0520: >>on in South Africa mm no that's right no I mean of course there's
always an it's always a difficult thing **positive discrimination** *isn't it?*

(SQ3P)

この結果が示唆するところを考える。一般的に発話末は、次の話者に発言の順番が移るターン末となる可能性があり、ターンテイキングと関わるものが最後の方に置かれやすい傾向がある (Lohmann & Koops, 2016: 437)。Allerton (2009) が区別するように、付加疑問はその形式上、聞き手からフィードバックを引き出す機能を持つが、テールにはその機能はない。これらを考えると、聞き手へターンを明け渡す機能を持つ付加疑問の方がテールより後に置かれやすいのではないかと推察される。その逆の順序、つまり (3) のような、ターン末とより関係が深い付加疑問が先でテールが後という順序の場合、指示対象の明確化や強意のために後から付け加えられたというテールの「後付け感」が強まる。この順の方が高頻度ということは、名詞句テールの主な機能は指示対象の確認・明確化であることを示唆する。

次に、それぞれの順序のテールを、その発話が評価的（評価・価値判断・態度・感情を表す発話）か否かという点で分類した。分類に当たっては、Timmis (2015b: 317-318) が指摘するように、明らかに評価的な語句がない場合でも文脈によって態度や感情を表す発話もあるため、出来る限りコンテキストを広げて判断した。その結果を表3に示す。

表3 発話の評価機能と TQ, TAIL (NP) の順序

	TQ + TAIL	TAIL + TQ
評価的 (N=164)	127 (77%)	37 (23%)
非評価的 (N=46)	38 (83%)	8 (17%)

以下の (5) は TQ + TAIL の非評価的発話、(6) は TAIL + TQ の評価的発話の例である。

- (5) S0439: so where's the Lake District is below Manchester? (...) further?

S0441: up (.) it's in the Scottish border *isn't it* **Lake District?**

(S382)

- (6) S0519: and they've rung up from the care people and said she needs to move
the bed away from the wall so she can get the frame in
S0520: right yeah that was always a tricky one **the bed** wasn't it? (STDN)

(5) のような非評価的な発話は、テールと共起する付加疑問は陳述の真偽の確認を求める機能を持つことが多い。共起するテールも、指示対象の確認・明確化機能が大きいと思われる。一方、(6) のような評価的な発話のテールは、評価の共感を求める対人関係の機能が強くなると推察され、付加疑問にも語調を和らげたり、聞き手に同意を促したりする機能が見られる。表3によると、評価的・非評価的発話とも、表2の名詞句テール一般の傾向と同じく、付加疑問の後にテールがくる TQ + TAIL の方が多いが、非評価的な発話における TQ + TAIL の割合 (83%) の方が、評価的な発話における割合 (77%) よりもやや高い。数が少なく頻度調査結果のみのため断定はできないが、(5) のような非評価的発話に多く見られる後付け的な TQ + TAIL のテールは、指示対象を確認・明確化する機能が大きく、(6) のような評価的発話に起こる傾向がやや高い TAIL + TQ は、聞き手との心的距離を縮める対人関係の機能が比較的大きいのではないかという仮説が立てられる。

4.1.2 テールの意味カテゴリー

4.1.1節で立てた仮説を裏付けるために、テールの名詞句が指すものを意味カテゴリーに分類した。分類は、名詞句の辞書的な意味のみによるのではなく、テールが照応する要素の指示対象をコンテキストから判断することによって決定した。

表4 名詞句の意味カテゴリーと TQ, TAIL (NP) の順序

	(具体的・物質的な) 物	事・概念	人	メタ言語	場所	動物
TQ + TAIL (N=165)	61 (37%)	42 (25.5%)	26 (15.8%)	10 (6.1%)	17 (10.3%)	9 (5.5%)
TAIL + TQ (N=45)	24 (53.3%)	3 (6.7%)	10 (22.2%)	2 (4.4%)	4 (8.9%)	2 (4.4%)

TQ + TAIL と TAIL + TQ の意味カテゴリーの割合で最も差が目立つのは、「事・概念」である。TQ + TAIL において「事・概念」を表す名詞句が25.5% と高く、

逆の順序における割合（6.7%）と差がある。TQ + TAIL の中でも「物」に次いで2番目の頻度を占める。(7)は「初めて住宅ローンを組むこと」という「事・概念」を表している（会話の表記方法は注1）。

- (7) S0192: this is it's mortgaged?
S0190: >>oh yes --UNCLEARWORD buying it yeah it's theirs
S0192: >>yeah so oh that's a big move *isn't it?* **getting your first mortgage**
(SW6A)

TQ + TAIL の「事・概念」のテールには、(7)のような動名詞や不定詞を用いた「～ということ（もの）」という説明的・概念的なテールがよく見られる。このことも、TQ + TAIL の順のテールは、前の代名詞の内容を後付け的に明確化する機能が大きいことを裏付ける。

一方、TAIL + TQ は、割合が一番高い「物」（53.3%）が、TQ + TAIL における割合（37%）よりも高く、また、「人」のカテゴリーの割合も同様である。(8)はTAIL + TQ のテールが「物」の例、(9)は「人」の例である。(8) (9)とも評価的発話で使われている。

- (8) S0571: --ANONnameM is gonna renew the team himself because they were
that good
S0517: >>no it's too expensive **that game** *isn't it?* (.) I've
S0572: >>>I don't wanna be in it this week
S0517: five pounds seventy something
(ST6R)

- (9) S0024: they were quite good **those golfers** *weren't they?* (S99N)

具体的・物質的な物や人を表すテールとTAIL + TQの順序の関係は、物や人に対する即時的な評価や感情を聞き手と共有しようとする対人関係的機能を示唆する。

さらに、表4のうちTQ + TAILとTAIL + TQの割合に差が見られる「物」「事・概念」「人」「メタ言語」の4カテゴリーのみを取り上げ、評価的・非評価的発話の分類を組み込んだものが表5である。

表5 名詞句の意味カテゴリー・発話の評価機能と TQ, TAIL (NP) の順序

	評価的 (N=140)		非評価的 (N=38)	
	TQ + TAIL	TAIL + TQ	TQ + TAIL	TAIL + TQ
(具体的・物質的な) 物	43	19	18	5
事・概念	38	3	4	0
人	21	9	5	1
メタ言語	5	2	5	0

表5によると、テールが表す名詞がメタ言語のものは12例あったが、2例を除いて全て TQ + TAIL の順である。メタ言語は言語そのものについて語るもので、テールは指示対象である言語を確認・明確化する機能が大きいと思われる。(10) は非評価的発話におけるメタ言語のテールの例である。

(10) S0617: that's how you say it *isn't it?* **Montenegro?** (ST82)

メタ言語のテールは、評価的・非評価的発話の両方において、TQ + TAIL の方が生起数が多く、この順序とテールの明確化機能の関係性が伺える。一方、表5の通り、TAIL + TQ で現れているメタ言語のテールは、2例とも評価的な発話であった。(11) はそのうちの1つである。

(11) S0496: George
 S0493: really?
 S0496: yeah
 S0493: quite like an old fashioned posh name **George** *isn't it?* (S6W8)

このテールにももちろん明確化機能はあるだろうが、評価的な陳述や主語と動詞の省略と相まって、評価や態度表明を聞き手と共有する対人関係的機能とより結び付いていると思われる。また、「事・概念」や「メタ言語」のテールは指示対象の明確化機能が大きいと指摘したが、この両カテゴリーの非評価的な発話では TAIL + TQ の順序がゼロだったことも、裏を返せば、TAIL + TQ が対人関係的機能の方とより関わっていることを示唆する。

また、上記の意味カテゴリーによる分類とは別に、(12) のような、人や物の名前、映画や歌の作品名などの固有名詞を使ったテールがどちらの順序で現

れているかを調べた。

(12) S0037: die Hard might might not be like a cinematic masterpiece

S0115: >>oh yeah I think that that was your favourite *wasn't it* **Die Hard?**

(S7MU)

表6 固有名詞の名詞句テール (N=46)

	固有名詞
TQ + TAIL (N=165)	41 (25%)
TAIL + TQ (N=45)	5 (11%)

表6は、それぞれの順序のテール全体の中で固有名詞が使われている割合を示しており、TQ + TAIL における割合の方が高いことが分かる。固有名詞のテールは、「メタ言語」や「事・概念」のテールと同様、指示対象の確認・明確化機能が大きいと考えられるので、やはりここでも TQ + TAIL の順序とこの機能の関連性が伺える。

4.1.3 指示代名詞 **that**

4.1.3節では、名詞句テールに用いられる指示代名詞の **that** を考慮に入れる。3節で言及した通り、テールには **that** がよく用いられる (Rühlemann, 2007: 197; Durham, 2011: 262; Timmis, 2015b: 320)。物理的に場面に存在する対象を指し示す直示用法の場合もあるが、基本的に、(13) のように会話に既に登場した旧情報を指示する前方照応用法である。

(13) S0663: so like black blue kind of grey like a slight?

S0661: >>ish (.) grey yeah it w- it was it was really nice actually **that colour**
wasn't it? (SXLC)

Rühlemann (2007: 197) や Durham (2011: 262) はさらに、**that** は話者の世界から聞き手の世界への視点の移動を表すため感情的含蓄を含み、表出された感情や態度を相手と共有しようとする対人関係的機能を持つと述べている。そのような機能を持つ **that** を含むテールと付加疑問の連鎖関係を調べるために、それぞれの順序に占める **that** / **those** を含むテールの割合を調べた。表7がその結

果である。

表7 that / those を含む名詞句テール (N=30)

	that / those を含む
TQ + TAIL (N=165)	17 (10%) (うち評価的発話16)
TAIL + TQ (N=45)	13 (29%) (うち評価的発話12)

that / those を含む名詞句テール30例のうち、ほとんどが評価的発話に現れており、視点を聞き手と共通の基盤へ移動させる that の特性と合致する。さらに、(13) のような TAIL + TQ のテールの方が that / those を含む確率がやや高く (29%)、このことも、この順序で現れるテールと対人関係的機能の関係を示唆している。

4.1.2, 4.1.3節の分析によって、4.1.1節で立てた仮説がある程度成り立つことが示された。つまり、発話末で付加疑問と共起する名詞句テールは、TQ + TAIL の順のテールは指示対象の確認・明確化機能を持つ傾向があるが、TAIL + TQ のテールは態度表明・感情表出を聞き手と共有する対人関係的機能が主であると考えられる。

4.2 代名詞テール

4.2節では、(14) のような代名詞テールについて考察する。

- (14) S0255: we walked there and walked all the way round and down by the river
and back round and long and
S0315: so it's a nice circuit **that** *isn't it?* (SGAN)

代名詞テールは名詞句テールと異なり命題の意味をほとんど含まないため、指示の繰り返しによる強意機能はあり得るが、指示対象の確認・明確化機能は考えにくい。代名詞テールの形式によって分類した結果は以下の通りである。

表8 代名詞テール (N=82) の形式

	that (all of that, that one 含)	those (those ones 含)	this (all this, this one 含)	they
生起数	72	6	3	1

Timmis (2015b: 319-320) や Mycock (2017: 258) などの先行研究が明らかにしているように、代名詞テールは *that* が圧倒的に多く、人称代名詞は稀である（本調査では *they* が一件のみ）。また、代名詞テールが照応する先行要素は、名詞句テールと同じく代名詞が69 (84%) と圧倒的に多く、(14) の *it* と *that* のように、節中でもテールでも名詞句による明示的指示がなされない場合がほとんどである。そのため Rühlemann (2007: 200) や Timmis (2015a: 96) は、代名詞テールの主機能を対人関係の機能と認定している。以下では、代名詞テールが付加疑問と共起する場合、4.1節の名詞句テールのように、連鎖構造によってテールの機能に違いが見られるのかどうかについて検討する。

代名詞テールと付加疑問の順序に関しては、表2が示す通り、TQ + TAIL と TAIL + TQ の割合はそれぞれ48%と52%で、名詞句テールの場合と異なって大きな差は見られなかった。この区別に、発話が評価的か非評価的かの区別を組み込んだのが表9である。ここでも、連鎖の順序に大きな割合の差は見られなかった。

表9 発話の評価機能と TQ, TAIL (PRO) の順序

	TQ + TAIL	TAIL + TQ
評価的 (N=70)	34 (49%)	36 (51%)
非評価的 (N=12)	5 (42%)	7 (58%)

次に、代名詞テールが *that* など1語の場合と、*that one*, *all of that* など2語以上から成る場合を比較した。その結果が表10である。

表10 代名詞テールの語数による分類と TQ, TAIL (PRO) の順序

	TQ + TAIL	TAIL + TQ
1語 (N=68) (<i>that</i> 61, <i>those</i> 5, <i>this</i> 1, <i>they</i> 1)	26 (38%)	42 (62%)
2語以上 (N=14) (<i>that one</i> 9, <i>this one</i> 1, <i>those ones</i> 1, <i>all of that</i> 1, <i>all this</i> 1, <i>that they had</i> 1)	13 (93%)	1 (7%)

数が少ないため一般化はできないが、2語以上の場合は1例を除いて全て、(15) のような TQ + TAIL の順序だった。

- (15) S0189: no I read that one
 S0192: you did?
 S0189: yeah
 S0192: do you like it?
 S0189: yeah it was good
 S0192: it's a good book *isn't it that one?* (S682)

本研究では all of that や that they had など代名詞テールに分類したが、表10に示した2語以上の代名詞表現の多くは、(15)のように物理的に存在する対象を直示する確認機能や all を用いた強調機能を持つ。このことは、より一層、TQ + TAIL 順で現れるテールと指示対象の確認・明確化機能の関連性の高さを示す。

一方1語のテールは、TAIL + TQ の割合 (62%) が、表2の代名詞テール全般における割合 (52%) より高い。1語の代名詞テールに限り、評価的発話と非評価的発話に分類した。

表11 代名詞テール (1語) の発話の評価機能と TQ, TAIL (PRO) の順序

	TQ + TAIL	TAIL + TQ
評価的 (N=58)	23 (40%)	35 (60%)
非評価的 (N=10)	3 (30%)	7 (70%)

評価的発話でも非評価的発話でも、TAIL + TQ の割合が、表2に示す代名詞テール全般における割合 (52%) より高いのは変わらない。(16) は評価的発話の TAIL + TQ の例である。

- (16) S0037: >>I watched that ages ago (.) there's some films that I really should've like I don't haven't seen many of the um Star Wars ones
 S0115: na (.) Bit overrated **that** *isn't it?* I think (S7MU)

(16) の評価的発話で相手に同意を求める付加疑問とともに使われたテール that は、4.1.3節で述べた that が持つ感情的含みも関係し、対人関係的機能が主と思われる。一方、非評価的発話の TAIL + TQ の that には、主に指示対象の確認や強意機能が見られた。つまり、1語の代名詞テールの場合は、発話が評価的か否か、どちらの機能が主かということに関わらず、付加疑問の前に置か

れる TAIL + TQ の順序の傾向が高いことが分かる。

4.3 名詞句テールと代名詞テール

4.3節では、4.1、4.2節で分析・議論した結果に基づいて、名詞句テールと代名詞テールの2タイプのテールが持つ付加疑問との共起関係を比較・考察する。名詞句テールが発話末で付加疑問と共起する場合、連鎖順序によってテールの主機能が異なる傾向があり、TQ + TAIL のテールは指示対象の確認・明確化機能、TAIL + TQ は態度表明・感情表出を聞き手と共有する対人関係の機能が主となる。このことは、以下のような付加疑問の前後両方に現れているテールを比較するとよく分かる。

- (17) S0653: it does I mean it's it it is a really good book a really interesting book
and it goes through classic stories and films like style I mean that is
what George Lucas who wrote Star Wars he did use that book The
Hero with a Thousand Faces to base the st- the i- the plot and it's very
successful **that plot isn't it Star Wars?** (SCG9)

話者は、George Lucas が *The Hero with a Thousand Faces* という本を基にして *Star Wars* の筋を考えたという話をしている。発話末の付加疑問の前につけられた *that plot* は、直前の *the plot* の繰り返しであり、*very successful* という評価と相まって対人関係的なテールと考えられる。一方、付加疑問の後の *Star Wars* という固有名詞テールは、タイトル名が複数、言及されているので、どの話のことかを確認・明確化するためのテールであると言える。

一方、代名詞テールと付加疑問の連鎖関係は、テールの形式（語数）が関わっていると考えられる。*all* などを含む2語以上の代名詞テールは付加疑問の後に来る傾向があり、名詞句テールと同じく、TQ + TAIL のテールが強調や確認・明確化機能を持ちやすいことを裏付けた。一方 *that* のような1語テールの場合、TAIL + TQ の傾向がやや高く、発話が評価的か否かに関わらず、音韻的に短い1語のテールは概念的核の直後（発話末の始め）に添えられる傾向がある。1語の代名詞テールは、発話が評価的か否かに関係なく TAIL + TQ の順の割合が高いことから、名詞句テールで明らかになった TAIL + TQ の順と対人関係的機能の関連は代名詞テールでは不明であった。ただ、(18)のような代名詞テールと名詞句テールの共起例を見ると、評価的発話の *that* の対人関係的機能は明

らかである。

- (18) S0012: well that ain't no good is it? that's that's that's a bit lazy **that** *isn't it?*
just having a sandwich (SY4A)

(18) では、付加疑問の前に代名詞テール、後に名詞句テールを用いている。動名詞で表された TQ + TAIL の名詞句テールは明らかに指示対象の確認・明確化機能を持っており、一方で、前の代名詞テール *that* は話者の評価や感情表出と関わる対人的機能を担っていると見られる。

5. おわりに

本稿は、発話末要素であるテールの語用的機能を、付加疑問との共起という観点から論じた。発話頭の要素に比べて発話末要素の連鎖構造についての研究は進んでおらず、特にテールは単体で議論されることが多い。本研究は、テールがしばしば他の発話末要素、特に付加疑問と共起することに着目し、Spoken BNC2014を用いて、テールと付加疑問の連鎖関係がテールの働きにどのように影響しているのかということ明らかにした。

テールが付加疑問と共起する時、共起する順序によってテールが果たす主な機能に違いが見られ、名詞句テールと代名詞テールは、付加疑問との共起パターンが同じではないことが示された。名詞句テールが付加疑問と共起する場合、TQ + TAIL のテールは指示対象の確認・明確化機能、TAIL + TQ のテールは聞き手と感情や評価を共有する対人関係的機能が主となる傾向がある。一方、代名詞テールについては、all などを含む2語以上の場合、TQ + TAIL の順で現れて強調や確認・明確化機能を持つことが多いが、*that* のような1語テールは、付加疑問の前に来る TAIL + TQ の傾向がやや高い。代名詞テールの場合は、TAIL + TQ の順序と対人関係的機能の関連は不明であった。

本研究は、様々な語用論的調節がなされる発話末の解明には、どのような発話末要素が共起するかという点とともに、どのような順で共起するかという点に関わることを明らかにした。発話末の要素の連鎖が構造を持つことを示唆し、テールなどの発話末の研究には、他の発話末要素との共起や順序を考慮に入れる必要があることを示すものである。

注

* 本稿の内容は、英語コーパス学会第46回大会（2020年10月，オンライン）における研究発表に基づいている。執筆にあたり，3名の査読の先生方より貴重なご助言・ご指摘を数多く頂いた。ここに謝意を表したい。本稿における不備や誤りは全て筆者の責任である。なお，本研究は JSPS 科研費 16K02907の助成を受けたものである。

1. 3節で述べる通り，本稿で引用する会話は The Spoken British National Corpus 2014 (Spoken BNC2014) からのものである。[S 番号]は話者 ID 番号を，引用末の括弧はテキスト ID 番号を示す。発話やターンの始まりは大文字ではなく，終わりもピリオドを用いていない。(.)は発話中に起こる1～5秒のポーズ，(...)は発話中やターン交替時の5秒を超えるポーズを示す。>>はそのターンの始まりが前のターンの終わり部分とオーバーラップしていることを示す。疑問符「?」は，形式的に明白な疑問や修辞疑問，付加疑問，明らかに上昇調で終わる陳述の発話につけられている。--ANONplace は非特定化された場所名，--ANONnameM と --ANONnameF は非特定化された男性名と女性名を表す。
2. ここでは，話者が話す順番を取ってから次の話者に発言の順番が移るまでを一つの「ターン」と考える。Spoken BNC2014でターン末を示すタグ </u> を利用すると，発話末のテールがターン末の場合のみを抽出する。2.2節の(2)のように発話末のテールの後もターンが維持される場合はヒットしないが，判別する件数を絞り込むために検索に用いた。

参考文献

- Aijmer, K. (1989) “Themes and Tails: The Discourse Functions of Dislocated Elements.” *Nordic Journal of Linguistics* 12: 137–154.
- Allerton, D. J. (2009) “Tag Questions.” In Rohdenburg, G. & Schlüter, J. (eds.), *One Language, Two Grammars?: Differences between British and American English*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 306–323.
- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., and Finegan, S. (eds.) (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education.
- Carter, R. (1999) “Standard Grammars, Spoken Grammars: Some Educational Implications.” In Bex, T. & Watts, R. J. (eds.), *Standard English: The Widening Debate*. London: Routledge, pp. 149–166.
- Carter, R., Hughes, R., and McCarthy, M. (2000) *Exploring Grammar in Context: Grammar Reference and Practice, Upper-intermediate and Advanced*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carter, R., Hughes, R., and McCarthy, M. (2011) “Telling Tails: Grammar, the Spoken Language and Materials Development.” In Tomlinson, B. (ed.), *Materials Development in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 78–100.
- Carter, R. and McCarthy, M. (1995) “Grammar and the Spoken Language.” *Applied Linguistics* 16, 2: 141–158.

- Carter, R. and McCarthy, M. (2006) *Cambridge Grammar of English: A Comprehensive Guide: Spoken and Written English Grammar and Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Durham, M. (2011) “Right Dislocation in Northern England: Frequency and Use — Perception Meets Reality.” *English World-Wide* 32, 3: 257-279.
- Leech, G. (2000) “Grammars of Spoken English: New Outcomes of Corpus-oriented Research.” *Language Learning* 50, 4: 675-724.
- Lohmann, A. and Koops, C. (2016) “Aspects of Discourse Marker Sequencing: Empirical Challenges and Theoretical Implications.” In Kaltenböck, G., Keizer, E., & Lohmann, A. (eds.), *Outside the Clause: Form and Function of Extra-clausal Constituents*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, pp. 417-445.
- Love, R., Demby, C., Hardie, A., Brezina, V., and McEnery, T. (2017) “The Spoken BNC2014: Designing and Building a Spoken Corpus of Everyday Conversations.” *International Journal of Corpus Linguistics* 22, 3: 319-344.
- McCarthy, M. (1998) *Spoken Language and Applied Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McCarthy, M. and Carter, R. (1997) “Grammar, Tails and Affect: Constructing Expressive Choices in Discourse.” *Text* 17, 3: 405-429.
- Mycroft, L. (2017) “Right-dislocated Pronouns in British English: The Form and Functions of ProTag Constructions.” *English Language and Linguistics* 23, 2: 253-275.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik, J. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Rühlemann, C. (2006) “Coming to Terms with Conversational Grammar: ‘Dislocation’ and ‘Dysfluency’.” *International Journal of Corpus Linguistics* 11, 4: 385-409.
- Rühlemann, C. (2007) *Conversation in Context: A Corpus-driven Approach*. London: Continuum.
- Rühlemann, C. (2019) *Corpus Linguistics for Pragmatics: A Guide for Research*. London and New York: Routledge.
- 澤田茂保 (2016) 『ことばの実際1—話しことばの構造』東京：研究社。
- 澤田淳・小野寺典子・東泉裕子 (2017) 「周辺部研究の基礎知識」小野寺典子 (編) 『発話のはじめと終わり—語用論的調節のなされる場所』東京：ひつじ書房, pp. 3-51.
- Timmis, I. (2009) “‘Tails’ of Linguistic Survival.” *Applied Linguistics* 31, 3: 325-345.
- Timmis, I. (2015a) *Corpus Linguistics for ELT: Research and Practice*. London: Routledge.
- Timmis, I. (2015b) “Tails.” In Aijmer, K. & Rühlemann, C. (eds.), *Corpus Pragmatics: A Handbook*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 304-327.